

自我のあと、霊のまえ

——ヘルダーリン『ヒュペーリオン』の魂概念——

小倉 紀蔵（元京都大学）

After Self, Before Spirit

— *The Notion of Soul in Hölderlin's Hyperion* —

Kizo OGURA

In order to understand modern notion of human being, it might be effective to employ a certain concept of 'betweenness' for precise analyzing. Since human being does not hold an atomistic way of existence in abstract time and space but appears between the complexity of the concrete and the abstract, our analysis should be directed toward the secret sphere at which modern selves painfully emerge. We can communicate with many lonesome selves who suffer agonies of estrangement between self and soul in the works of modern literature. While these kinds of existential sufferings in the literature of the 19th century should be interpreted to be solved solely in the sphere of individual concern, self in the previous period's literature, on the other hand, should be treated and defined as the relevancy of soul and spirit. In Hölderlin's *Hyperion*, for example, although Diotima depends on the relationship between self and spirit, Hyperion, by contrast, wants to recognize self to be independent of spirit. In Diotima's worldview, self must be tightly connected with spirit or nature in order to obtain the perfect harmony; Hyperion, on the contrary, denies this notion and thinks that self must be the subject of activity, in which soul should not easily be connected with spirit or nature. Destruction occurs automatically between both of the selves, which makes this novel a normal elegy, and then resurrection of all relationships is eagerly wanted to be occurring by the two as the eternal return, which makes this epic the elegy of modernly wounded soul appearing after self, before spirit.

Keywords: self, soul, spirit, estrangement, eternal return

キーワード: 自我、魂、霊、乖離、永遠回帰

1. 「悲歌的」ということ

ふたつの「魂」

ヘルダーリンの『ヒュペーリオン (Hyperion)』¹。

この痛ましい本の言葉は難解ではないが、内容はわかりやすくはない。その言葉の凸凹の劇しさ、急上昇と急降下のめまぐるしい痙攣は、まるでこの言葉を語る人の精神が錯乱しているのではないか、と思わせるほどだ。しかし、そのように読んではならないだろう。これは錯乱ではない。痛ましい調和への憧れなのである。痛々しく分裂した調和の予兆なのだ。

この本の末尾に近いところでヒュペーリオンはこう叫ぶ。

おお、魂よ、魂よ、世界の美よ、不壊の美よ、永遠の若さで魅惑する美よ。あなたは存在している。いったい死がなんだろう。そして人間の悲しみがなんだろう。(2-2-8:300²)

ここでヒュペーリオンはなぜ、「魂よ、魂よ (O Seele! Seele!)」という言葉をつけ加えているのだろう。なぜ、「世界の美よ」から始まらなかったのだろう。「あなたは存在している。いったい死がなんだろう。そして人間の悲しみがなんだろう」というのは、「美」についてのみ語られているのか、それとも「魂」についても語られているのか。前者である場合と、後者である場合とでは、この本の読み方自体が根本的に変わってしまうのではないか。

そして私の考えでは、この作品の舞台が「ヒュペーリオンの悲歌的な性格にとって (für Hyperions elegischen Charakter)」(序：8) ふさわしいと作者にいわれる理由は、まさにここに示されているのだ。

この本の冒頭に戻ってみよう。そこには、こう書かれてある。

愛する祖国の地は、ふたたびよろこびと悲しみをあたえる。(改行) ぼくはこうして、毎朝コリントス海峡の高みに立つ。ぼくの魂は、しばしば、花々のあいだを飛ぶ蜜蜂のように、日に燃える山々の裾を右からも左からもすずしく洗う海のあいだを飛びかう。(1-1-1:9-10)

これはこの本の冒頭の叙述だが、この時点ですでにディオティーマはこの世にいないのだ。それも、ヒュペーリオンとの劇しい愛を経た上で、痛ましくこの世から消え去った後なのである。そのことを読者は後になって、つまり第一巻、第二部の第十二書簡 (1-2-12:108 ページ) に至

¹ 『ヒュペーリオン』の原文は、以下のものを使用した。Friedrich Hölderlin *Sämtliche Werke und Briefe in drei Bänden, Band 2 Hyperion Empedokles Aufsätze Übersetzungen*, Herausgegeben von Jochen Schmidt, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1994.

² 『ヒュペーリオン』の日本語訳は、青木誠之訳『ヒュペーリオン ——ギリシアの隠者』ちくま文庫、2010を使用した。引用文に記載してあるたとえば (1-2-3:93-94) という数字は、第一巻、第二部、第三書簡で、ちくま文庫版の 93 から 94 ページという意味である。そのほか、手塚富雄訳『ヘルダーリン全集 第3巻』河出書房新社、2007) および渡辺格司訳 (岩波文庫、1936) を参照した箇所にはその旨を明記してある。

ってようやく知ることになる。そしてその事実を知って、ヒュペーリオンのこれまでの（つまりこの書簡までの）平静さは一体何だったのか、と訝しく思うのである。

ここで重要なのは「魂（Seele）」という言葉である。この本の末尾で「魂よ、魂よ」と劇しい叫びを挙げた痛ましいヒュペーリオンは、この本の冒頭では、自分の魂を「蜜蜂のように」海上に飛翔させている。

このふたつの魂の関係はいかなるものなのだろうか。魂への悲痛な呼びかけ（末尾）と、自由に悠々と魂を遊弋させる（冒頭）こととの間には、一体どのような関係があるのだろうか。「悲歌的」というこの書物の性格は、もしかするとこのふたつの魂の関係に宿っているのではないか。このような視点から、『ヒュペーリオン』を読んでみたいと思う。

ふたつの魂

「ふたつの魂」の問題に対するひとつめの解釈は、冒頭の「飛翔する魂」が、過去の追体験にともなう内省によって、掉尾の「悲痛な魂」に変貌したというものである。冒頭部分は、ドイツからコリントスに戻ったヒュペーリオンが過去の回想を始める部分だ。この時点ですでにヒュペーリオンはずたずたに傷つき、「ぼくには、これこそ自分のものだと言えるものがなにひとつない」「地上での仕事は終わった」（1-1-2:12）と厭世的な心情を吐露している。その一方で、千々の思いに分裂しそうになる自我を、「自然（Natur）」や「一であること（Eines zu sein）」という観念を動員してかろうじて縫合しようとしている。その努力は痛々しく、涙ぐましい。

いっさいとひとつであること、これこそは神の生、これこそは人間の天だ。（改行）生きとし生けるものとひとつであること、至福の忘我のうちに自然のいっさいのなかへ帰ってゆくこと、これこそは思想とよるこびの頂点、聖なる山頂、永遠の安らぎの場なのだ。（1-1-2:13-14）

しかしこの縫合の試みは、「意識（Besinnen）」や「思いをめぐらすこと（分別の世界：手塚）（Nachdenken）」の介在によって容易に挫折し、ヒュペーリオンは自然から拒否されてなすすべもなく佇むのだ。

けれども、一瞬、意識がもどると投げ落とされている。ぼくは思いをめぐらす。すると、現世のあらゆる苦しみを負って以前とすこしも変わらない孤独な自分を見出す。こころの避難所である永遠に一なる世界は去り、自然は腕をとぎす。ぼくはよそ者のように自然のまえに立ち、自然を理解することができない。（1-1-2:14）

このようなヒュペーリオンが、ベラルミンへの手紙という手段によって回想と内省を重ねてゆくうちに、魂の永遠性と最終的な調和性に気づいてゆき、掉尾においてそれは確信となって虚空に叫ばれる、という解釈である。この理解は、『ヒュペーリオン』が教養小説であるという解釈に結びつく。ただし一般的な教養小説とは異なり、ヒュペーリオンは一度経験した自分の人生を

もういちど追体験して内省することにより、真の意味での成長を遂げるのである。

以上のような解釈が、この小説に対しては妥当な理解を与えてくれるようにも見える。つまり、ヒュペーリオンは二重の意味で成長したのだ。最初の実体験と、そしてそれに対する内省とによって、彼は人生を二度生き、そして二度成長した。それは一直線的ではなかったし、かぎりない蛇行と挫折と逡巡と退歩を繰り返しはしたが、とにもかくにも主人公は成長し、そして物語は終わったのだ。

だが、このような解釈はあきらかに、この小説の構造を無視している。最後の書簡（2-2-8）において、ヒュペーリオンはドイツに留まりながら、「もっともうつくしい真昼」（298）に、「遠くの野」の「泉のほとり」（297）にすわっているとき、突然ディオティーマの声と会話を交わすのだ。そのときの会話が、例の「おお、魂よ、魂よ」（300）なのである。そして最も有名な次の言葉が続き、この小説は終わる。

世界の不協和音は愛しあう者たちのいさかいに似ている。和解は争いのさなかにあり、別れていたものはすべてまためぐりあう。（改行）血管は心臓で分かれ、ふたたび心臓にもどる。すべては、ひとつの永遠の灼熱する生（いのち）なのだ。（2-2-8:300）

すなわち、よく誤解されてしまうのだが、この言葉がこの小説におけるヒュペーリオンの最後の言葉なのではない。この言葉がヒュペーリオンの最終的な認識であり、この美しい認識に到達したところで予定調和的にこの小説が終わっていたら、世界はどんなに美しく完結したであろうか。しかしもしそうだとしたら、この小説が「悲歌的」だといわれた理由の半ば以上は消え失せてしまうのではないだろうか。

「悲歌」の意味

「悲歌的」という規定の理由は、実は、逆なのだ。つまり、冒頭部の「こころの避難所である永遠に一なる世界は去り、自然は腕をとぎす。ぼくはよそ者のように自然のまえに立ち、自然を理解することができない」（1-1-2:14）という孤独から出発して、終末部の「和解は争いのさなかにあり、別れていたものはすべてまためぐりあう。（中略）すべては、ひとつの永遠の灼熱する生（いのち）なのだ」（2-2-8:300）という高揚に到達したから「悲歌的」なのではない。

逆に、ドイツでヒュペーリオンは「すべては、ひとつの永遠の灼熱する生（いのち）なのだ」という認識に到達したにもかかわらず、その後のコリントスでは再び「ぼくはよそ者のように自然のまえに立ち、自然を理解することができない」という絶対の孤独におちいってしまった。そしておそらくは、この円環は永遠につづくのである。合一の高揚で一切が終結するのではなく、その後にまた分裂の悲慘さがやってくる。そして痙攣的な内省を反復した後にまた、同じことがくりかえされる。それゆえ、「悲歌的」なのである。

もちろんヘルダーリンがこの作に「悲歌的」という規定をくだったのは第一巻の「序」においてであり、その時点では第二巻の結末部分はまだ書かれていない。しかし、第一巻までですでに

そのような悲歌的円環構造は描かれているし（「人間と自然が結び合って、いっさいを包括する**ひとつ**の神性となるのだ」（167）が第一巻の最後の言葉）、さらに第二巻の最終部においてこの分裂の円環が完成することによって、「悲歌的」という半ば予言的な性格は永遠性を付与されたのである。

終わらない物語

つまり、この物語は終わらないのだ。最後の手紙の最後の文章、「ぼくはそう考えた。くわしくはまた（So dacht' ich. Nächstens mehr.）」という言葉にその謎は宿っている。ヒュペリオンは少なくとも、自分の語りをここで永遠に終了させようとは思っていない。続きがあるのだ。しかしその続きは書かれない。むしろ書かれる必要がない。なぜなら、その続きはこの本の冒頭だからである（構造上はそうではないが、内容的にはそうならざるをえない）。

別の言葉でいえば、この本は教養小説ではない。未熟なもの、未完成なもの、未発達で不完全なものから、成熟へ、完成へ、発達と完全さというテロスに向かってのベクトルを描くのが教養小説であるなら、この本はその反対のことを語っている。人間は決して成熟も完成も発達もしないということ、そのようなテロスへ向かっての一直線的で目的論的な運動をしないこと、上昇と下降、高揚と沈滞、拡張と収縮は永遠に反復されること、そのことによってのみ生と死の隔壁は乗り越えられること、つまり生はテキストの内部に閉じこめられず、それをはみ出、そこからあふれ出て永遠の円環運動をすること……それらのことをこの本は語っているのである。この本はそれゆえ一個の完結した物体ではない。生の脈動はウロボロスの蛇のように最初のページと最後のページを接合させ、そのことによってエクリチュールとしての、印刷された文字としての、製本された本としての構造を内破する形でテキストから生が飛び出てくるのである。

この本を読んだ者は、その「わからなさ」に苦しめられながらも、すでにヒュペリオン的な生の永遠運動にからめとられてしまっている。生を始点から終点への電車走行のようなものだと考える人びとは、そそくさとこの得体の知れないテキストから逃げようとするだろう。しかし何らかの不可思議さに訝しく思いながらも、生とは直線運動ではないというビジョンを少しでも隠し持っている人びとは、この跳躍する魚のように奔放な生のテキストを前にして、「もっともうつくしい真昼」（298）を鋭敏に感じ取るのだろう。その最も典型的な人物は、いうまでもなくニーチェであった³。

³ 「ところで、大いなる正午とは、人間が自分の軌道の真ん中であって、動物と超人との中間に立ち、自分が歩み行くべき夕暮れへの道を自分の最高の希望として祝う時である。というのは、それは或る新しい朝への道だからだ」。ニーチェ、吉沢伝三郎訳、『ツァラトゥストラ 上』、ちくま学芸文庫、1993、142ページ。

2. 魂と霊のたたかい

「魂」の悲歌

この本が「悲歌的」とあるという構造上の理由は、以上のようなものである。

しかし、これで「悲歌的」という規定のすべてを説明しえたわけではもちろんない。内容的に言えば、ヒュペーリオン「悲歌」性を最もよく表しているのは、「魂」という言葉なのだ。

ヒュペーリオンは成長しない。ヘーゲル的な弁証法の運動も知らない。彼はつねに同じ過ちを繰り返し、そして落胆し、沈潜する。しかしだしぬけにまた起き上がり、生の充溢へと自らを駆り立てる。そしてそれは悲劇的に挫折する。ここで悲劇的というのは、ギリシア的な意味である。運命を乗り越えようと果敢に立ち上がるが、その主体性はあらかじめ運命の中に再帰化されてしまっている。そのことを主人公は知らない。そういう意味での悲劇性である。

悲劇には滑稽さが欠如してはならない。観客席から見ると、主人公の主体性は運命の中に再帰的に書きこまれてしまっていることは自明なのに、舞台にいる主人公だけがそのことを知らず、運命と闘っている。そこに湧き上がる滑稽さである。

ヒュペーリオンの場合には、「魂」という言葉がこの滑稽さを演出している。舞台上でヒュペーリオンひとりが、この「魂」という言葉をめぐって堂々めぐりをしているのだ。この本をよく読んでみると、ヒュペーリオンだけが「魂（Seele）」という言葉がたくさん使っていることがわかる。アラバンダもディオティーマも、「魂」とはほとんどいわない。ディオティーマの場合、最期の瞬間が迫った最後の手紙ではじめて「魂」という言葉を使っているが、それまではたった二回しか「魂」とはいわなかった。しかし悲劇的なのは、ヒュペーリオンだけが、そのことに最後まで気づいていないことなのだ。そして掉尾の例の「おお、魂よ、魂よ」という叫びとなり、それが冒頭に続いてもお、何事もなかったかのように「魂」にこだわっている。

『ヒュペーリオン』という小説の悲歌性は、ここに宿っている。つまり構造上の永遠回帰と、内容上の「魂」への執着である。そして、「魂」をめぐるディオティーマとの決定的な齟齬である。「魂」をめぐる、最初から最後までヒュペーリオンはディオティーマと対話ができいていない。ディオティーマはさりげなく「魂」という言葉を回避し、あるいはヒュペーリオンが「Seele」と発音するのがまったく聞こえていないかのように振る舞う。そして最後まで、というより正確には最初のページに戻っても、ということつまり永遠に、ヒュペーリオンはそのことに気づいていないのである。

この決定的な齟齬を理解するために、ヒュペーリオンとディオティーマの出会いから死別までを、「魂」という言葉を中心にして再構成してみることも重要であろう。

魂と霊

「魂」という言葉をめぐってディオティーマとヒュペーリオンがいかに絶望的に乖離していたのか、そのことを滑稽にもヒュペーリオンはまったく知らなかったが、ディオティーマは熟知していた。そしてディオティーマは、直接的にではなく、修辞を使って、その乖離についてヒュペ

ーリオンに伝えるのだ。そのことを詳しく語った手紙がある。それを読んでみよう（2-2-4）。

まず彼女は彼に対して、「不幸なかつた、気高い精神のヒュペーリオン」（240）と語りかける。ヒュペーリオンが「わたしの魂はあなたの魂とひとつになって天上の自由のなかに生きています」（192）というような語りかけをするのに、なぜそれに対してディオティーマは「気高い魂のヒュペーリオン」という語りかけをしないのか。ヒュペーリオンは早く気づくべきであった。ディオティーマはいう。

Wem einmal, so, wie dir, die ganze Seele beleidigt war, der ruht nicht mehr in einzelner Freude, wer so, wie du, das fade Nichts gefühlt, erbeitert in höchstem Geiste sich nur, wer so den Tod erfuhr, wie du, erbolt allein sich unter den Göttern.⁴

斜体で強調されているこの文において、ディオティーマはほぼ全霊をこめてヒュペーリオンを立ち直らせようとしている。なぜヒュペーリオンはディオティーマのこの親切な忠告を無視したのだろうか。痛恨ともいえる齟齬である。

ディオティーマはヒュペーリオンに、個別的な（*einzelner*）レベルに止まらず、霊（*Geist*）のレベルにまで上がってきなさいと促している。なぜならあなたの個人的な魂（*Seele*）は全体的に害され、傷つけられ、機能しえない状態にあるからだ。かくなるうへは、個人の魂を捨てて神々の霊のレベルに合一するしかない。それはとりもなおさずディオティーマの隠された半身の世界なのである。なぜならディオティーマこそ、魂ではなく霊の次元に生きる者であることが、この本のそこここで示唆されているからである。

ということは、ヒュペーリオンに別れを告げているディオティーマはここで、実は逆に隠された自己の半身と合一せよと語っていることになる。ヒュペーリオンが「魂」だと考えているディオティーマとは別離し、もうひとつの本当のディオティーマ、つまり「霊」としての彼女と合一せよという促しであり、救済の言葉なのである。

しかし彼女はその言葉がヒュペーリオンに受け入れられないであろうことを予感しているし、霊としての彼女があまりにもヒュペーリオンの魂に近づいてしまうことの危険性を赤裸々に語っている。ディオティーマの半身は自然（*Natur*）であるから、それを傷つけることは彼女にはできない。それが彼女の限界であり使命なのだ。彼女はこう痛々しく正直に告白する。

Ich fand dich, wie du bist. Des Lebens erste Neugier trieb mich an das wunderbare Wesen. Unausprechlich zog die zarte Seele mich an und kindischfurchtlos spielt' ich um deine gefährliche Flamme.-Die schönen Freuden unserer Liebe sänftigten dich; böser Mann! nur, um dich wilder zu machen. Sie besänftigten, sie trösteten auch mich, sie machten mich vergessen, dass du im Grunde trostlos warst, und dass auch ich nicht fern war, es zu werden, seit ich dir in dein geliebtes Herz sah.⁵

⁴ Friedrich Hölderlin *Sämtliche Werke und Briefe in drei Bänden, Band 2 Hyperion Empedokles Aufsätze Übersetzungen*, S.142

⁵ 同上、142-143 ページ。

ヒュペーリオンにはじめて出会ったとき、ディオティーマの好奇心が彼女を駆って彼に近づかせた。青木誠之訳では「わたしはそのすばらしいひとに近づきました」となっているが、これだとディオティーマが主体になってしまう。原文では、あくまでもディオティーマ自身は客体なのだ。好奇心（Neugier）が主体であるが、この好奇心とは、「乙女」としての半身をいつているのだ。「乙女」としての半身が、「自然」としての半身（mich）に強制しているという構図である。

次の文は青木訳では「言いようもなくそのこまやかな魂に引きつけられました」となっているが、これも正確に言えば、ディオティーマの主体性を打ち出しすぎた訳になっている。むしろ「その物優しい魂は得も言はず私の心を惹きました」（渡辺格司訳、187）とか、「言いようもない力で、その人のこまやかな魂はわたしを引きつけ」（手塚富雄訳、120）というほうがよい。ここではディオティーマを完全な客体性として把握しなくてはならないのだ。なぜなら、ディオティーマの「自然」としての半身はヒュペーリオンの魂（「あなたの危険な炎」）を恐れ、そこに近づきたくないと思っている。そこに近づくことは、自己の破滅の道であることを知っている。それなのに、彼女の「乙女」としての半身は、盲目的に惹かれて「自然」をヒュペーリオンの魂に強引に近づけようとしてしまうのである。だから、ディオティーマの全体が自らの意志でヒュペーリオンに近づいているという印象を少しでも与えてしまう訳は、誤解を生みやすい。ディオティーマがほんとうにいいかかったことを明確に打ち出して、かなり説明的に意識してみると、この言葉は次のようなものになるだろう。

わたしは魂としてのあなたを知ってしまいました。人生ではじめて、わたしの中で自然と乙女が分離し、そして人間的な乙女が自然を強制してこのすばらしい魂に近づかせてしまったのです。言葉では抵抗できない力で、その人のやさしい人間的な魂はわたしを引き寄せました。わたしは子どものようになってしまい、魂がおそろしいものだということを忘れてこの危険な炎＝魂のまわりで遊んでしまいました。——まったく別々のベクトルを持つわたしたちは奇跡的に互いに愛することができ、その美しいよろこびがあなたの魂をやわらげました。しかし、あなたはやはりだめな人だったのです。愛のよろこびによって人間的なレベルから解放されて霊にまで昇華されるかと思ったあなたの魂は、逆にもっと劇しく人間的になってしまいました。愛のよろこびはわたしのこともやわらげ、慰めました。しかしそのことは、あなたが根本的に慰められえないことを忘れさせてしまいました。つまり、わたしにとって愛のよろこびは霊に向かうものだったのに対し、あなたにとって愛のよろこびは魂のものだったのです。そしてこの魂を宿す心を見つめているうちに、わたしまであやうく魂そのものになってしまうかもしれない、ということをおのれを愛のよろこびが忘れさせてしまったのです。

この最終的に危険な道を回避するため、ディオティーマはヒュペーリオンと別れようとする。しかし「いけないかた」といわれたヒュペーリオンは、あくまでも自分の道、自己の魂の道を選んで歩もうとするのだ。ここに、調和の可能性はすでにない。ディオティーマは彼女の道、ヒュペーリオンは彼の道を歩むしかなくなったのである。

そしてそのことを決定的に語る次の言葉を深く味わってみたい。

ごきげんよう。愛しいかた。骨折り甲斐のある場所にあなたの魂を捧げてください。世界にはきつと、あなたがご自分を解放できる戦いの場が、祭壇があるはずです。よい力が跡形もなく夢まぼろしのようにならなくなるとすれば残念なことです。けれどもあなたは、どのような最期を迎えることになるうとも、神々のもとへお帰りになるかたです。あなたがそこから出発なさった神聖で自由で若々しい自然の生^{いのち}のなかへもどられるのです。それだけがあなたの願いでしょうし、わたしの願いでもあるのです。（2-2-4:246）（下線強調は引用者による）

ここでディオティーマはいったんヒュペーリオンを見放してしまっている。人間的な「魂」に固執するヒュペーリオンを、「霊」や「自然」に戻そうとする努力を放棄してしまっている。つまり「魂」と「生」を結びつける回路をあきらめてしまっている。「魂」によっては死しかもたらされないことをヒュペーリオンに注意喚起し、そしてその死によって初めて「自然」「生」に戻ることができるということを宣言した。だからこれはヒュペーリオンに対する死亡宣告なのだ。「魂」を自ら滅ぼすことを求めたのである。

それゆえ最後の手紙でディオティーマは次のようにいう。

あなたは没落しなければならないでしょう。絶望しなければならないでしょう。けれども、精神があなたを救うでしょう。（2-2-6:276）

Du müßtest untergehn, verzweifeln müßtest du, doch wird der Geist dich retten.⁶

この「精神（der Geist）」を、「あなたの精神はあなたを救うでしょう」（手塚富雄訳、139）と訳すと誤解が生じるだろう。むしろ「一つの霊があなたを救ふでせう」（渡辺格司訳、217）のほうがディオティーマの語ろうとしていることに庶幾い。あなたの魂があなたを滅ぼすのだから、それを救うのはあの一なる霊なのだ、ということをディオティーマは語ろうとしているからである。

ディオティーマを殺す

この本の中でディオティーマは、「魂（Seele）」という言葉を一回だけ使っている。そのうち一回は、先に挙げた「骨折り甲斐のある場所にあなたの魂を捧げてください」であり、そのほかに「生きているすべての魂よ」（2-2-6:277）、「魂にみちた自然のたわむれ」（2-2-4:244）という表現がある。しかしこれはヒュペーリオンの「魂」観とは異なる使用方法である⁷。これら以外の五

⁶ 同上、161 ページ。

⁷ 肯定的に使われた一回は、ヒュペーリオンの教育によって青年たちが精神的に成長したことを評価する言葉の中に出てくる。「こうして、青年たちは偉大なものをひとつに結び合わせる術を学び、魂にみちた自然のたわむれ（das Spiel der Natur, das seelenvolle）を理解するようになり、つまらない冗談は忘れたのです」（2-2-4:244）。しかしこの「seelenvolle」という言葉はディオティーマが「魂」を「自然」や「たわむれ」に結びつけて解釈しようとした表現であることを忘れてはならない。ここにもディオティーマとヒュペーリオンの齟齬が露呈しているのだ。

回はすべて彼女の最後の手紙に出てくるのだが、これは五回とも「わたしの魂」という表現になっている。そしてこの「わたしの魂」という言葉を、ディオティーマはつねに否定的な意味、ないし不満足な気持ち、あるいは不達成ゆえの後悔をこめて使っているのである。彼女の最後の手紙を見てみよう。

それとも、わたしの魂は愛の感激にひたるなかで熟しすぎてしまったのでしょうか。（中略）でも、飛ぶことを教えてくださったのなら、どうしてわたしの魂にあなたのもとへ帰ってゆくことも教えてくれないのでしょうか。（2-2-6:274）

思っていることをつつみ隠さず申しましょう。あなたの火はわたしのなかに生きていました。あなたの精神がわたしのなかに移っていたのです。でも、それだけでしたら、どうということもなかったと思います。あなたの運命だけが、わたしの新しい生に死をもたらしたのです。わたしの魂はあなたのおかげで強すぎるほど強くなりました。ですから、あなたでしたらわたしの魂をおとなしくさせることもできたでしょう。あなたはわたしの生を大地から引き離してしまわれました。あなたでしたらわたしを大地につなぎとめておくこともおできになったことでしょう。わたしの魂を、魔法の輪のなかに封じこめるように、あなたの胸のなかに抱きすくめることもおできになったでしょう。（中略）けれども、洪水によって山頂へ駆り立てられるように、あなたのご自身の運命によって精神の孤独へと追い立てられたあのと、ああ、戦いの嵐があなたの牢獄を吹き飛ばし、わたしのヒュペーリオンはかつての自由な世界に飛び去ってしまわれた、とすっかり思いこんだあときはじめて、わたしの運命は決まりました。そして、まもなく終わるのでしょうか。（2-2-6:275-276）

これが悪魔の声だということに、もしかするとヒュペーリオンは気づいていたのかもしれない。これは、ヒュペーリオンの知るディオティーマの声ではない。かよわい乙女の姿をした、悪魔の声なのである。ここには誠実さのかけらもない。ここで語られているのはすべて虚偽である。そもそもディオティーマが「わたしの魂」などというはずがないのだ。「思っていることをつつみ隠さず申しましょう」という怪しげな言葉が、これが嘘だということを暗示している。

ヒュペーリオンが、ディオティーマの死に関して冷淡であるように見えるのは、「死と生はひとつ」という観念の力にもよるだろうが、もうひとつは、このような虚偽の言葉（魂の言葉）をいうディオティーマから離れることによって、霊としての、自然としての、美としての、つまり「ひとつの神性」としてのディオティーマを保全しようとしたのではないか。

そう考えるとこの小説は、ヒュペーリオンがディオティーマを殺した、その殺人の記録なのだということもできる。魂のレベルでどうしても人間ヒュペーリオンに惹かれてしまうディオティーマを、自己から分離し自然の霊の世界に「隠す」ことにしか、ヒュペーリオンには道がなかった。

3. 自我のあと、霊のまえ

自我、魂、霊

この小説において、苦しんでいるのは誰だろう。ヒュペーリオンだけではない。分裂の苦しみの中でもがいているのは、ディオティーマも同じなのだ。

それならヒュペーリオンとディオティーマが、互いに分離せず、至福の中で合体する道はあったのだろうか。いくつかの可能性を探ってみよう。

まず、ヒュペーリオンが「人間的な魂」「個人的な魂」に固執しつつ、しかも「自然」から距離を置いていたらどうなったであろうか。これはアラバンダとほぼ同じ道を歩むことを意味している。このとき、ディオティーマがもし「自然」の側面のみを強調したとしたら、ヒュペーリオンとディオティーマの接点はなくなる。しかしディオティーマが「自然」を放棄し、「人間」「個人」のほうへ歩み寄れば、これは近代という扉を開ける道になったであろう。主観的な魂と主観的な魂の合体という相互主体的な関係性であり、個別と普遍の美しき調和というギリシア的な共同体を破壊する絆である。

次にヒュペーリオンが「人間的な魂」「個人的な魂」を捨てて、「自然」の道に没入したらどうなっていたであろうか。この場合、ディオティーマの「自然」の側面と完全に調和し、ふたりは汎神論的な至福の霊の世界に遊弋することができたであろう⁸。

魂と霊の乖離へ

しかし、この小説では以上のような道は歩まれなかった。ヒュペーリオンは「自然」に憧れながら他方で「人間」「個人」「行為」「計画」「意志」の道にも劇しく憧れ、その分離は極限に達した。ディオティーマはそもそも植物的な「自然」（エーテルの世界）を象徴していたが、ヒュペーリオンに出会うことによって自分の中の「乙女」の部分（すなわち「人間」「個人」の部分）に目覚め、そして「人間的」「個人的」「魂的」なヒュペーリオンに惹かれた。しかしその道を歩むことは結局、自らの霊の世界を毀損することだと悟り、自ら死を選ぶ。ディオティーマは「死んだ」というよりまさに「隠れた」、あるいは「殺された」といってよいと思う。ヒュペーリオンを含むあらゆる生きとし生けるものがこの世での活動を終え、死に至るとき、その魂を昇華させ霊にまで高める存在としてのディオティーマが必要なのである。ディオティーマはそれゆえ、魂のレベルに自らを完全に引き下ろすことはできず、霊の世界に隠れた。しかしそれは「あの世」なのではない。この世で死んだ者は、この世で霊の世界にはいつてゆくのである。

このように整理してみると、この小説がいおうとしたことが、おぼろげながら見えてくる。第一巻の冒頭でヒュペーリオンは次のようにいう。

ああ、行動などすべきではなかったのだ。どんなに多くの希望が残され、どんなにゆたかでいられたこ

⁸ これは「東洋的」な調和の世界とも理解できるが、東洋を蔑視するヒュペーリオン（1-2-19:151）としては、この道をとることはできなかった。

とだろう。——（改行）そうとも、人間のことなど忘れるがいい、欠乏と不安とたびかさなる怒りにさいなまれるころよ。そして、おまえが出で立ったところへ、移ろうことのない静かなうつくしい自然の腕のなかへ帰っていくのだ。（1-1-1:11-12）

もしこれがヒュペーリオンの本心なのだとしたら、結局、この本はヒュペーリオンの敗北の書であり、彼が「隠遁」するのは、あらゆる「人間的」「個人的」なことから隔離された地点でやがて霊の世界に上昇し、その懷に抱かれるためであると解釈される。しかしそれでは、ヒュペーリオンが「近代」という時代の出入り口で引きちぎれるほど苦悩した意味がなくなってしまうのだ。

やはりアラバンダが重要な役割を担っているだろう。フィヒテをモデルにしているという説もあるアラバンダは、この小説の中で明確に「自我」「人間」「行為」を代表している人物である。

ヒュペーリオンは、少年期におけるアダマスとのプラトンのな霊的紐帯から脱して⁹、アラバンダという「人間」に出会う。ヒュペーリオンの悲劇はここから始まっているといってもよいのだが、それはすべての近代人の悲劇を代表してもいるのだ。

いちど「人間」になってしまった人間は、二度と自然的調和の世界に安らぎながら棲まうことはできない。そのことをわかっていながら、なぜヒュペーリオンは自然を求めるのか。

ヒュペーリオンにとっては、やはり自然よりも自我が大切だったのだと思う。彼は、ディオティーマ（自然）と一体になりたい。そのことを「魂」という言葉で正当化しようとする。魂はひとつであると信じようとする。しかし個別的な魂と一なる自然は、まったく別個のものなのだ。その意味でこの小説はロマン主義の瓦解の書でもある。カントからフィヒテにかけての自我をすでに経験してしまったヘルダーリンは、ノヴァーリス的なロマン主義に完全に自己同一化することはすでにできなかった。

この書は、魂と霊（自然）の乖離の物語である。自然（ディオティーマ）は霊によって合一しようとするが、ヒュペーリオンは魂に固執する。しかし彼も実際は知っているのだ、「精神（Geist）は最後にはわれわれをいっさいのものと和解させる」（2-1-7:190）ということ。魂では和解できないことを。しかしそのことを知っていながらも、魂による和解を試みたヒュペーリオンは挫折し、そして霊を守るためにディオティーマは隠れた。

それゆえ掉尾の言葉「おお、魂よ、魂よ」というのは、この時点でまだヒュペーリオンが、魂がすべてを破壊したことをわかっていないがゆえに悲歌的なのだ。自然と行為が衝突してすべてが破壊されたのではない。自然（ディオティーマ）と行為（アラバンダ）は、出会ってもいないのだ。行為（アラバンダ）はあきらかに自然（ディオティーマ）に惹かれており、出会いたがっている（2-2-5）。しかし自然と行為を媒介する魂という概念が、すべてを破壊してしまったのである。

だからこの書は、自我と霊、行為と精神を結ぶ魂という概念の、敗北（破壊）と復活（永遠回

⁹ ちなみに、アダマスに関する描写にはすべて「Seele」ではなく「Geist」という言葉が使われていることも重要である。

帰）の書なのである。

※ 筆者は2024年9月22日のハイデガー・フォーラム第19回大会において、「東アジアの生命哲学——日常臨終、回帰、反生命」という発表を行った。その発表原稿は「日本群島と総合的人間」という論文にして、小島毅・加藤泰史編『尊厳概念の転移』（法政大学出版局、2024年12月）という論文集に収めた。このことに関してはハイデガー・フォーラム電子ジャーナルの編集長の了解を得ていた。今回、上記論文集に所収の論文と同じ内容のものを本ジャーナルに掲載させていただくことはできないので、別原稿を準備した。したがって本稿は、2024年大会の発表とは内容がまったく異なるものである。このことに関しても、編集長の了承を経ている。